

**GRADE guidelines 13. Preparing Summary of Findings tables and evidence profiles
-continuous outcomes**

Gordon H. Guyatt, Kristian Thorlund, Andrew D. Oxman, Stephen D. Walter, Donald Patrick, Toshi A. Furukawa, Bradley C. Johnston, Paul Karanickolas, Elie A. Akl, Gunn Vist, Regina Kunz, Jan Brozek, Lawrence L. Kupper, Sandra L. Martin, Joerg J. Meerpohl, Pablo Alonso-Coello, Robin Christensen, Holger J. Schünemann

【日本語訳】
GRADE ガイドライン 13: SoF テーブルとエビデンスプロファイルの作成 —連続アウトカム
抄録

Summary of Findings (SoF) テーブルにおける連続アウトカムの提示は解釈をとりわけ困難にする。各研究で同じアウトカム指標が使用されており、その指標の単位が直感的に解釈可能なもの(例: 入院期間、症状の期間)であれば、平均値の差を提示するのが通常は望ましい。アウトカム指標の自然単位が容易に解釈可能でない場合、2値アウトカムを生成するための閾値を選択し、相対効果と絶対効果を提示するのがより望ましい方法となる。

複数の研究で構成概念は同じだが異なる指標が使用されている場合、要約指標を算出するには研究ごとに同じ測定単位に変換する必要がある。最も確立され最も広く使われているアプローチは、各研究の平均値の差をその標準偏差で割り、標準偏差単位(標準化平均差)にて統合結果を提示することである。このアプローチの欠点としては、根底にある集団における異質性の度合いの差や、解釈の難しさがあげられる。これ以外のアプローチとしては、最も一般的または解釈可能な測定単位で結果を提示する方法、2値指標に変換して相対効果と絶対効果を提示する方法、介入群と対照群の平均値の比を提示する方法、最小重要差単位で結果を提示する方法があげられる。われわれは各アプローチのメリットと限界について概説し、メタアナリシスとガイドライン作成者のための指針を提供する。